

2013年7月20日 一年を経て

提訴へ

「吉川慎之介君の悲劇を二度と起こさないための～学校安全と再発防止を考える会」を設立

この一年、慎之介を突然失った悲しみと苦しみ、愛おしい思いは、何ひとつ変わることなく時は止まったまま、突き付けられた「なぜ？」の自問自答は続き、月日が流れました。

慎之介は、単なる川の水難事故で亡くなったわけではありません。

保護者と一緒に行った現場検証では、何度も川へ入り、救助してくださった方々から話を伺い、事件の概要を記録し把握しました。

事件直後、初めて訪れた川は、大きな石が点在し、水の流れは速く、大人でも足を取られるほどで、そこは上流の立派な溪流地でした。教諭らは、このような場所に、無装備・無計画な状態で子供たちを連れていき、保護者への事前説明は安全な場所での「水遊び」とし、梅雨明け間近で不安定な天候が続いていたにもかかわらず「長年通っているところだから大丈夫」という漫然とした理由で下見を行わず、園長にいたっては、当日、保護者からの水遊びに対して不安視する声を、受け止めずに軽くあしらひ、お泊り保育の行事を決行した結果、死亡事件を招いたのです。

増水後、パニック状態だった教諭らは通報もしておらず、救助活動を疎かにし、救命活動さえも遠くから眺めるだけで傍観者に徹し、救急車へも同乗していませんでした。駆けつけた病院で私を待っていたのは警察で、随分後から到着した教諭らは、状況を把握していない私に対し「どうでしたか？」などと聞き、あとは、ただ項垂れ口を閉ざし、離れたところで立っただけでした。

その後、「何も話せません」という西条聖マリア幼稚園の教諭たちと、学校法人ロザリオ学園本部の不誠実で冷酷な対応には、何度も傷つき失望し、酷く罵りもしましたが空しさだけが残り、行政をはじめ様々な機関に訴えても、解決されないことを痛感し、心が折れそうになりながらも、事件と向き合うことに誠実でありたい、という思いを貫いてきました。

慎之介の死を通して見えた真実、それは、安全危機管理の不備、子供の命を預かり守るという意識の欠如、事件を有耶無耶にし、やり過ごそうとする組織体制、その組織に頼ることで責任を回避しようとする教諭らの姿勢、謝罪・説明責任などは棚に上げ、死亡事件を起こしても平常通りの運営が許されるという、幼稚園を指導監督する体制の無い現状の中で、幼稚園を信頼し、大切な我子を預けていた事に、愕然としました。

同じ過ちが繰り返されないために、できることは何でもしようと、事件の調査・公表・対話を拒む教諭達や学園組織と交渉する手段として、この裁判を選択した事に後悔はありません。

また、この事件を活かすことを考え、真実を追及し再発防止を目的とした「吉川慎之介君の悲劇を二度と起こさないための～学校安全と再発防止を考える会」を立ち上げました。

これまで、たくさんの方と話し合い、力をお借りし、ここまで来ました。

慎之介の命も、支えて下さっている方々の思いも、積み上げてきたことも、決して無駄にすることなく、これから歩んでまいりたいと思います。

2013年（平成25年）7月20日 吉川優子